

【 復活のトロパリ 第5調 】

しんじゃよ、ちちとせいしんとともにはじめ
 信者 父 聖神 共 始

なきことばわがすくいのため
 言 吾 救 爲 に

どうていぢょよりうまれしものをほめうとうて
 童 貞 女 生 者 讃 歌

おがむべし、かれあまんじてそのみにて
 拜 彼 甘 其 身

じゅうじかにのぼりしをしのびその
 十 字 架 上 死 忍 其

こうえいのふくかつにてしせしものを
 光 榮 復 活 死 者

ふくかつせしめたまえばなり。
 復 活 給 賜 ば な り。

【 グリゴリイ・パラマのトロパリ 第8調 】

せいきょうのとしび、きょうかいのかため
 正 教 燈 教 會 保 固

およびきょうし、しゅうしらのかざり、しんがく
 及 教 師 修 士 等 飾 神 學

しのうちのかたれぬぐんし、きせきしゃ
 師 中 勝 軍 士 奇 跡 者

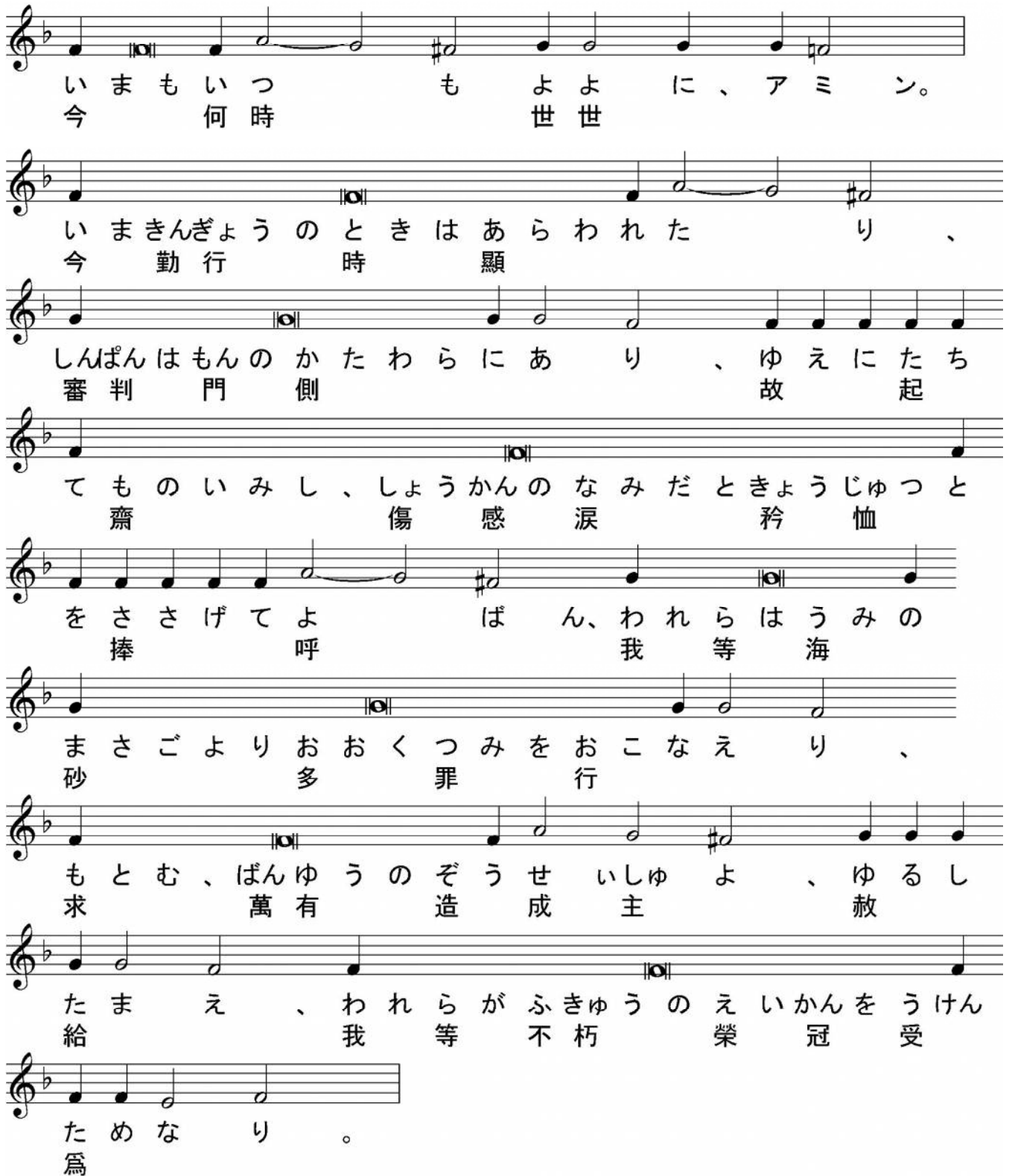
グリゴリイ、テサロニカのほまれ、おんちょうのでん
 譽 恩 寵 傳

どうしよ、われらのたましいのすくわれんこ
 道師、我等霊の救
 とをつねにいのりたまえ。
 常祈給

【 グリゴリイ・パラマのコンダク 第8調 】

こうえいはちちとことせいしんにきす。
 光榮父と子聖神歸
 しんげんしゃグリゴリイよ、われらなんぢえいち
 神言者我等爾睿智
 のせいにせられししんみょうなるきかかん、しんが
 聖神妙機關神學
 くのこうめいなるラツパたるものをどうしんにか
 光照明角者同心歌
 しょうしていのる、しんぷよ、げんしのちえ
 頌祈る、神父原始智慧
 のまえにたつちえとして、われらのちえを
 前立智慧我等智慧
 かれにむかわしめたまえ、われらがよばん
 彼向給え、我等呼
 ためなり、おんちようのでんどうしよ、よ
 爲恩寵傳導師慶
 るこべ。

【 大齋第二主日のコンダク 第4調 】



い ま も い つ て も よ よ に 、 ア ミ ン 。
今 何 時 世 世 に 、 ア ミ ン 。

い ま き ん ぎ ょ う の と き は あ ら わ れ た り 、
今 勤 行 時 顯

し ん ぱ ん は も ん の か た わ ら に あ り 、 ゆ え に た ち 起
審 判 門 側 故 起

て も い み し 、 し ょ う か ん の な み だ と き ょ う じ ゅ つ と
齋 傷 感 涙 矜 恤

を さ さ げ て よ ば ん 、 わ れ ら は う み の
捧 呼 我 等 海

ま さ ご よ り お お く つ み を お こ な え り 、
砂 多 罪 行

も と む 、 ば ん ゆ う の ぞ う せ い し ゅ よ 、 ゆ る し
求 萬 有 造 成 主 赦

た ま え 、 わ れ ら が ふ き ゅ う の え い か ん を う け ん
給 我 等 不 朽 榮 冠 受

た め な り 。

司祭) (黙誦： ^{せい} 聖なる神、 ^{かみ} 聖者の中に ^{せいじゃ} 息い、 ^{うち} セラフィムより ^{いこ} 聖三の聲を以て歌頌せられ、
^{せいさん} ヘルヴィムより ^{こえ} 讚榮せられ、 ^{もつ} 悉 ^{かしょう} くの天軍より ^{さんえい} 伏拜せられ、 ^{ことごと} 萬物 ^{てんぐん} を無より ^{ふくはい} 有と ^{ばんぶつ} なし、 ^む 人を ^{ゆう} 爾の像と ^む 肖とに依りて造り、 ^ゆ 爾が ^む 諸の賜を以て之を飾り、
^{ひと} 願う者に ^{なんぢ} 智慧と ^{ぞう} 明悟とを ^{しょう} 與え、 ^よ 罪を行 ^{つく} う者を ^{なんぢ} 棄てずして、 ^{もろもろ} 其救 ^{たまもの} の爲に ^{もつ} 痛悔 ^{これ} 。

た われらいや ふとう なんぢ しょぼく こ とき おい なんぢ せい
を立て、我等卑しくして不當なる 爾 の 諸 僕を、此の時に於ても、 爾 が 聖な

さいだん こうえい まえ た なんぢ とうぜん ふくはいさんえい たてまつ た もの
る 祭壇の光榮の前に立ちて、 爾 に 當然の伏拜讚榮を 奉 るに堪うる者と

しゅさい なんぢみづか われらざいにん くち せいさん うた う なんぢ じんじ
なしし主宰よ、 爾 親ら我等罪人の口よりも 聖 三の歌を受け、 爾 の 仁慈を

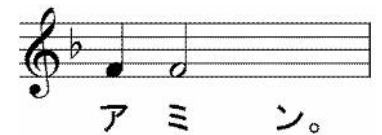
もつ われら のぞ われら およ じゆう じゆう つみ ゆる わ たましい からだ
以て我等に臨み、我等に凡そ自由と自由ならざる罪を赦し、我が 靈 と 體 と

せい われら しょうがいぜんこう もつ なんぢ つと え たま せい しょう
を 聖にし、我等に 生涯善功を以て 爾 に 務むるを得せしめ 給え、 聖なる 生

しんぢょ こせい なんぢ よろこび な しょせいじん きとう よ
神女と古世より 爾 の 喜 を爲しし 諸 聖 人との祈禱に依りてなり、)

司祭) けだしわ かみ なんぢ せい われらこうえい なんぢちち こ せいしん けん いま いつ よよ
蓋 我が神よ、 爾 は 聖なり、我等光榮を 爾 父と子と 聖 神に 献ず、 今も何時も世世

に、



【 聖三祝文 】

せいなるかみ、せいなるゆうき、せいなる
聖 神 聖 勇 毅 聖
じょうせいのものよ、われらをあわれめ
常 生 者 我 等 憐
よ。せいなるかみ、せいなるゆうき、せい
聖 神 聖 勇 毅 聖
なるじょうせいのものよ、われらをあわれ
常 生 者 我 等 憐
めよ。せいなるかみ、せいなるゆうき、
聖 神 聖 勇 毅
せいなるじょうせいのものよ、われらをあわ
聖 常 生 者 我 等 憐

れ め よ 。 こう え い は ち ち と こ と せ い し ん
光 榮 父 子 聖 神

に き す 、 い ま も い つ も よ よ せ に 、 ア ミ ン 。
歸 今 何 時 世 世

せ い な る じ ょ う せ い の も の よ 、 わ れ ら を あ わ
聖 常 生 者 我 等 憐

れ め よ 。 せ い な る か み 、 せ い な る ゆ う
聖 神 聖 勇

き 、 せ い な る じ ょ う せ い の も の よ 、 わ れ ら を
毅 聖 常 生 者 我 等

あ わ れ め よ 。
憐

司祭) (黙誦：主の名に依りて來たる者は崇め讃めらる、ヘルヴィムに座する者よ、爾は其國
の光榮の寶座に在りて恒に崇め讃めらる、今も何時も世に、)

【 プロキメン 提綱 主日第5調 及び 成聖者の第1調 】

司祭) つつし き しゅうじん へいあん
慎みて聽くべし、衆人に平安、

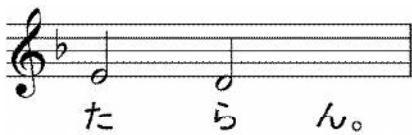
誦經) なんぢ しん
爾の神にも、

司祭) えいち
睿智、

誦經) プロキメン、主よ、爾は我等を保ち、我等を護りて、斯の世より永遠に至らん、

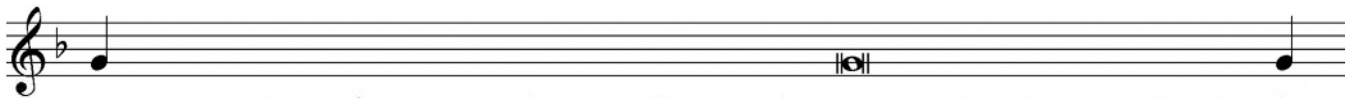
しゅよ、なんぢはわれらをたもち、われらをまも
主 爾 我 等 保 我 等 護

りて、このよよりえいえんにい
至 斯 世 永 遠 至

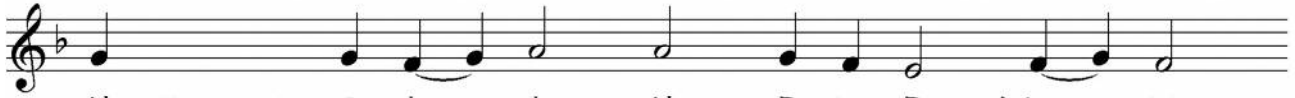


た ら ん。

誦經) ^{しゅ われ すく たま けだしぎじん た} 主よ、我を救い給え、蓋 義人は絶えたり、



しゅよ、なんぢはわれらをたもち、われらをまも
主 爾 我 等 保 我 等 護



りて、このよ り えい えんに い
斯 世 永 遠 至



た ら ん。

誦經) ^{わ くち えいち いだ わ こころ おもい ちしき いだ} 我が口は睿智を出し、我が心の思は智識を出さん、



わがくちはえいちをいだし、わがこ
我 口 睿 智 出 し 我 心



ろのおもいはちしきをいだしさん。
思 智 識 出

【 アポστόロス 使徒經 304 端 エウレイ書1章10節~2章3節 】

司祭) ^{えいち} 睿智、

誦經) ^{せいしと じん たつ しょ よみ} 聖使徒パヴェルがエウレイ人に達する書の讀、

司祭) ^{つつし き} 謹みて聽くべし、

誦經) ^{しゅ なんぢはじ ち もとづ てん なんぢ て わざ これら ほろ しか なんぢ} 主よ、爾 初めに地を基 けたり、天も 爾 が手の造工なり。此等は亡びん、然れども 爾

^{なが そん これら みなころも ごと ふる なんぢいふく ごと これま これら かわ しか} は永く存す、此等は皆 衣 の如く古び、 爾 衣服の如く之を捲き、此等は易らん、然

^{なんぢ かわ なんぢ とし おわ かも いづれ てんし むか かつ い} れども 爾 は易らず、 爾 の年は終らざらんと。神は何 の天使に對いて曾て云いしか、

^{なんぢわ みぎ ざ わ なんぢ てき なんぢ あし だい な いた かれら みなほうじ しん} 爾 我が右に坐して、我が 爾 の敵を 爾 の足の凳と爲すに迄れと。彼等は皆 奉事する神、

^{つかわ すくい つ もの ため えきじ もの あら こ ゆえ われらき ところ} 遣 されて、救 を嗣がんとする者の爲に役事する者に非ずや。是の故に我等聞きし 所 を

もっともつし おそ あるい はな お けだしも てんしら よ つ ことば かた
 尤 慎 むべし、恐らくは 或 は離れ落ちん。蓋 若し天使等に藉りて告げられし 言 は堅
 た およそ いはい ふじゅん こうせい むくい う われらか ごと すくい かえり
 く立ちて、凡 の違背と不 順 とは公正の 報 を受けしならば、我等此くの如き 救 を 願
 みずして、如何ぞ 追るるを得ん。斯れ 始 主に因りて 伝えられ、彼より聞きし者に因りて我
 ら うち かた た かみ よ そのむね したが きゅうちょう きせき しゅじゅ いのう およ
 等の中に 堅く立てられ、神に縁りて、其旨に 循いて、休 徴、奇蹟、種 種の異能、及
 び 聖神の分予を以て 證 せられたり。

(比較用 口語訳) 「主よ、あなたは初めに、地の基をおすえになった。もろもろの天も、み手のわざ
 である。これらのものは滅びてしまうが、あなたは、いつまでもいますかたである。すべてのもの
 は衣のように古び、それらをあなたは、外套のように巻かれる。これらのものは、衣のように変る
 が、あなたは、いつも変ることがなく、あなたのよわいは、尽きることがない」とも言われている。
 神は、御使たちのだれに対して、「あなたの敵を、あなたの足台とするときまでは、わたしの右に
 座していなさい」と言われたことがあるか。御使たちはすべて仕える霊であって、救を受け継ぐべ
 き人々に奉仕するため、つかわされたものではないか。こういうわけだから、わたしたちは聞かされ
 ていることを、いっそう強く心に留めねばならない。そうでないと、おし流されてしまう。とい
 うのは、御使たちをとおして語られた御言が効力を持ち、あらゆる罪過と不従順とに対して正当な
 報いが加えられたとすれば、わたしたちは、こんなに尊い救をなおざりにしては、どうして報いを
 のがれることができようか。この救は、初め主によって語られたものであって、聞いた人々からわ
 たしたちにあかしされ、さらに神も、しるしと不思議とさまざまな力あるわざとにより、また、御
 旨に従い聖霊を各自に賜うことによって、あかしをされたのである。

アポστόロス
 【 使徒経 318 端 エウレイ書 13 章 17 節～21 節 】

誦經) けいてい およそ さいさいちょう ささげもの まつり けん ため た ゆえ かれ またけん
 兄弟よ、凡 の司祭 長 は 禮 物と祭祀とを 獻 ずるが爲に立てらる、故に彼も亦 獻 ず
 べき物なかるべからざりき。彼若し地に在りしならば、司祭と爲らざりしならん、蓋 此には
 りつぼう したが ささげもの けん さいさいら てんじょう もの かたち かげ ほうじ もの
 律法に 循 いて 禮 物を 獻 ずる司祭等、天 上 の者の 形 と影とに奉事する者あり、モ
 そのまく つく とし つ ごと いわ つつし やま おい なんぢ しめ
 イセイに其 幕を造らんとせし時に、告げられしが如し、曰く、慎 みて山に於て 爾 を示
 のり したが いつさい つく しか かれ いまさら まさ ほうじ え 口 さら
 されし式に 遵 いて、一切を造れと。然れども彼が今 更に 優れる奉事を得たるは、更に
 よ きやく もとづ さら よ やく ちゅうほしや な かな
 善き許 約に 基 ける更に善き約の中 保者と爲りしに 稱 う。

(比較用 口語訳) 兄弟たちよ。おおよそ、大祭司が立てられるのは、供え物やいけにえをささげるた
 めにほかならない。したがって、この大祭司もまた、何かささぐべき物を持っておられねばなら
 ない。そこで、もし彼が地上におられたなら、律法にしたがって供え物をささげる祭司たちが、現に
 いるのだから、彼は祭司ではあり得なかったであろう。彼らは、天にある聖所のひな型と影とに仕

えている者にすぎない。それについては、モーセが幕屋を建てようとしたとき、御告げを受け、「山で示された型どおりに、注意してそのいっさいを作りなさい」と言われたのである。ところがキリストは、はるかにすぐれた務を得られたのである。それは、さらにまさった約束に基いて立てられた、さらにまさった契約の仲保者となられたことによる。

【 アリルイヤ 主日第2調 及び 成聖者の第2調 】

司祭) ^{なんぢ へいあん} 爾に平安、

誦経) ^{なんぢ しん} 爾の神にも、

司祭) ^{えいち} 睿智、

誦経) ^{ねが しゅ うれい ひ おい なんぢ き} アリルイヤ、願わくは主は憂の日に於て爾に聴き、^{かみ な なんぢ ふせ まも} イアコフの神の名は爾を扨ぎ衛

らん、



誦経) ^{しゅ おう すく またわれら なんぢ よ とき われら き たま} 主よ、王を救え、又我等が爾に呼ばん時、我等に聴き給え、



誦経) ^{ぎじん くち えいち い そのした ぎ かた} 義人の口は睿智を言い、其舌は義を語る、



司祭) (黙誦: 人を愛する主宰よ、我が心に神を知る智慧の 浄き光を輝かし、我が思念

め ひら なんぢ ふくいん おしえ さと たま わ うち なんぢ ふく いましめ
の目を啓きて、爾が福音の教を悟らしめ給え、我が衷に爾の福たる誠を

おそ おそれ い われら ことごと にくたい よく ふ およ なんぢ よるこ ところ
畏るる畏をも入れて、我等が悉くの肉體の慾を踏み、凡そ爾の喜ぶ所

おも か おこな ぞくしん せいかつ す いた たま けだし かみ
を思い且つ行いて、屬神の生活を過ぐるを致させ給え、蓋ハリストス神よ、

なんぢ わ たましい からだ こうしょう われらなんぢ なんぢ むげん ちち しせいしぜん
爾は我が靈と體との光照なり、我等爾と爾の無原の父と至聖至善にし

いのち ほどこ なんぢ しん こうえい けん いま いつ よよ
て生命を施す爾の神とに光榮を獻ず、今も何時も世世に、アミン。)

【 エヴァンゲリオン 福音經 マルコ福音書7端 2章1~12節 】

司祭) 睿智、肅みて立て聖福音經を聴くべし、衆人に平安、



司祭) マルコ傳の聖福音經の讀、



司祭) 謹みて聴くべし、彼の時イイスカペルナウムに入れり、彼が家に在ること聞えたらば、

ただち おお ひとあつま もん かたわら み い ところ いた かれ これ おしえ の
直に多くの人集りて、門の傍にも身を容る處なきに至れり、彼は之に教を宣

べたり。ちゆうぶう もの たづさ かれ きた よにんこれ か ひと おお よ
癱瘋の者を攜えて、彼に来れるあり、四人之を昇けり、人の衆きに因りて、

かれ ちか え そのあ ところ やね ひら これ あな ちゆうぶう もの ふ とこ
彼に近づくを得ずして、其在る處の屋蓋を啓き、之に穴して、癱瘋の者の臥したる牀

つ おろ かれら しん み ちゆうぶう もの い こ なんぢ つみ なんぢ ゆる
を縋り下せり。イイスカ彼等の信を見て、癱瘋の者に謂う、子よ、爾の罪は爾に赦さ

る。ここ あるがくしら ざ 口 ところ うち ぎ いわ こ ひとなん か けがし い ひとり
る。此に或學士等の坐せるあり、心の中に議して曰く、斯の人何ぞ斯く褻瀆を言う、獨

かみ ほか たれ つみ ゆる え そのしん もつ ただち かれら か おのれ うち
神より外に、誰か罪を赦すを得ん。イイスカ其神を以て、直に彼等が斯く己の衷に

ぎ 議するを知りて、彼等に謂えり、なんぢらなん ところ うち か ぎ ちゆうぶう もの なんぢ
議するを知りて、彼等に謂えり、爾等何ぞ心の中に斯く議する、癱瘋の者に、爾の

つみゆる い あるい お なんぢ ところと ゆ い いづれ やす しか なんぢ
 罪赦さると言い、或は起きて、爾の牀を取りて行けと言うは、孰か易き。然れども爾
 らひとこちあ つみ ゆる けん し たため ちゅうぶう もの むか いわ
 等が人の子の地に在りて罪を赦す権あることを知らん爲、(癱瘋の者に向いて曰く、
 なんぢ い お なんぢ ところと なんぢ いえ ゆ かれただち お ところと しゅう
 爾に謂う、起きて、爾の牀を取りて、爾の家に往け。彼直に起き、牀を取りて、衆
 の前に於て出でたり、衆駭きて、神を讚榮し、我等未だ嘗て斯くの如きことを見ざ
 りきと云うを致せり。

(比較用 口語訳) イエスがまたカペナウムにお帰りになったとき、家におられるといううわさが立
 ったので、多くの人々が集まってきて、もはや戸口のあたりまでも、すきまが無いほどになった。そ
 して、イエスは御言を彼らに語っておられた。すると、人々がひとりの中風の者を四人の人に運ば
 せて、イエスのところに連れてきた。ところが、群衆のために近寄ることができないので、イエス
 のおられるあたりの屋根をはぎ、穴をあけて、中風の者を寝かせたまま、床をつりおろした。イエ
 スは彼らの信仰を見て、中風の者に、「子よ、あなたの罪はゆるされた」と言われた。ところが、
 そこに幾人かの律法学者がすわっていて、心の中で論じた、「この人は、なぜあんなことを言うの
 か。それは神をけがすことだ。神ひとりのほかに、だれが罪をゆるすことができるか」。イエスは、
 彼らが内心このように論じているのを、自分の心ですぐ見ぬいて、「なぜ、あなたがたは心の中で
 そんなことを論じているのか。中風の者に、あなたの罪はゆるされた、と言うのと、起きよ、床を
 取りあげて歩け、と言うのと、どちらがたやすいか。しかし、人の子は地上で罪をゆるす権威をも
 っていることが、あなたがたにわかるために」と彼らに言い、中風の者にむかって、「あなたに命
 じる。起きよ、床を取りあげて家に帰れ」と言われた。すると彼は起きあがり、すぐに床を取りあ
 げて、みんなの前を出て行ったので、一同は大いに驚き、神をあがめて、「こんな事は、まだ一度
 も見たことがない」と言った。

【 エヴァンゲリオン 福音經 イオアン福音書 36 端 10 章 9～16 節 】

司祭) しゅ かれ きた じん い われ もん われ よ い もの すくい え かつい
 主は彼に来れるイウデヤ人に謂えり、我は門なり、我に由りて入る者は救を得、且入
 り且出でて、くさば え ぬすびと きた ただぬす ころ ほろぼ たため われ きた
 草場を得ん。盗の來るは、唯盗み、殺し、滅さん爲のみ。我の來りし
 そのいのち たも かつゆたか これ たも たため われ よ ぼくしゃ よ ぼくしゃ おのれ
 は、其生命を有ち、且豊に之を有たん爲なり。我は善き牧者なり、善き牧者は己の
 いのち ひつじ たため す ぼくしゃ やといびと ひつじ おのれ ぞく もの おおかみ きた
 生命を羊の爲に捐つ。牧者ならざる傭者、羊の己に屬せざる者は、狼の來る
 み ひつじ す に おおかみ ひつじ うば またこれ ちら やといびと に そのやといびと
 を見て、羊を棄てて逃ぐ、狼は羊を奪い、又之を散す。傭者は逃ぐ、其傭者
 もつ ひつじ かえり われ よ ぼくしゃ われ ぞく もの し われ ぞく
 たるを以てなり、羊を顧みず。我は善き牧者にして、我に屬する者を識り、我に屬す
 もの またわれ し ちち われ し ごと われ またちち し かつわ いのち ひつじ たため す
 る者も亦我を識る。父の我を識るが如く、我も亦父を識る、且我が生命を羊の爲に捐

